

学習効果の高い漢字字書を目指して：
構造と意味の関連付けによるアプローチ
**INNOVATING A PEDAGOGICALLY EFFECTIVE KANJI LEARNER'S
DICTIONARY: A SEMANTIC AND STRUCTURAL APPROACH**

西田 眞由美
Mayumi Nishida
Language House LLC

ジェローム・バーネット
Jerome E. Barnett
Independent Researcher

1. はじめに

筆者達は十年余りにわたって日本語を母国語としない学習者を対象とした漢字字書の共同編纂プロジェクトに携わってきた。

この字書は、初級文法を一通り学習し、五百字程度の基本漢字を勉強した中級から上級レベルにかけての学習者を対象とし、見出し字は約三千八百字、そのうち使用頻度の高い約二千三百字（全常用漢字を含む）に字解説を付けている。また、字解説、字義、定義などは媒体語を使用せず、基本的に全て平易な日本語で表現し、日本語での字・熟語の理解を深めるようにしている。ただし五百字程度の基本漢字がまだ十分読めない学習者や、媒体語で意味の確認をしたい学習者のために、英訳も参照できるようにしている。

筆者達がこの漢字字書プロジェクトを立ち上げたきっかけは、五百字程度の基本漢字を覚えたあたりから、それ以上の漢字・語彙の習得に困難がみえはじめると多くの学習者が多く、これが中級から上級にかけての伸び悩みの原因の一つになっていることに気付いたことである。この現象を筆者達は「五百字の壁」と呼び、対応する教材を開発したいと考えた。

実際にこのレベルの学習者からは、「日本語は無限に新しい言葉が出て来るようで、長年勉強していても自信が持てない」という声をよく聞く。日本語での一般読書、また高度の業務を遂行するには、二千字程度の漢字と一万語以上の熟語の習得が必要であるといわれている。筆者達は、学習者に「五百字の壁」を乗り越えて、千字、さらに二千字以上のレベルに到達させるのに有効であると考えられる様々なアプローチをこの字書に盛り込んだが、本発表ではその根幹となる「字解説」を中心に、それに続く「字義、熟語、定義」の部分を紹介したい。

2. なぜ「五百字の壁」が乗り越えにくいのか

(1) 字の形にとらわれ、意味を軽視する

初級から中級前期の段階で学習する約五百字の漢字には、象形文字、指示文字が多く含まれ、会意文字、形声文字の割合はさほど多くない。したがって、字の元になったとされる絵や図形のイメージが字を覚える大きな助けとなる。また、会意文字、形声文字も比較的単純な形のものも多く、「日+月=明」「田+力=男」「日+寺=時」「扌+寺=持」といったように、絵や図形のイメージを組み合わせることで理解・記憶の手掛かりとなし得るのである。

しかし、五百字を超えたあたりから、複雑な形の会意文字、形声文字の割合が急増し、特に形声文字の割合は常用漢字（現行1945字）中約7割を占め、さらに日本人が日常使用する頻度が高いとされる三千字中では8割を超える。これらの字の理解・記憶には、前段階で有効だった絵・図形のイメージを手掛かりとするアプローチだけでは不十分になってくる。

それでは、中級から上級にかけての漢字指導には、形声文字を中心に、複雑な会意文字を構造的に、意味を中心に理解し記憶するアプローチが必要であると考えられるが、現教材には形声文字を紹介する章などが見られるものの、代表的な文字および音符の説明にとどまり、構造と意味による理解を促す情報を包括的に提示した教材はまださほど普及していないようである。

形声文字は、部首と音符（音符号）のそれぞれの意味を組み合わせることで新しい意味が生み出され、代表的な音読みは音符で表される。ところが、学習者の多くは音符の音機能をよく知らないばかりか、音符が意味を表す意符としての機能を併せ持つことも十分に知らない。

また、形声文字、会意文字には、部首と音符以外にも字構成要素を含むことがあり、これらにも共通の意味があるのだが、学習者の認識は浅い。（例：「ク」「ヨ」「寸」は手の形と意味を表す。「ヨ」「寸」は部首であると同時に、部首以外の構成要素としての機能もある。）つまり、部首、音符、その他の構成要素に関する知識がかなり不足しているのである。

以上のような部首、音符、その他の構成要素の知識を深めずに、形ばかりに気をとられて漢字を覚えようとする、意味の乏しい暗記に陥り、定着が弱くなりがちである。

（2）字を日本語で理解・記憶しようとしなさい

もう一点、「五百字の壁」を作り出している原因として、学習者の多くが字の意味を理解し記憶するのに、媒体語（英語話者の場合は英語）に頼り過ぎる傾向があることが挙げられる。無論、筆者達は初級レベルの漢字学習には媒体語の使用は不可欠であり、中・上級レベルでも意味の確認や翻訳作業に媒体語の使用が有効であることは認めている。しかし、中級から上級へと移行していく過程では、漢字を日本語で理解し記憶することは、語彙を増やし表現力を豊かにする上でも必要であると考えられる。

字を日本語で理解しなければ、音読みと訓読みの関連付けが十分に出来るようにならず、特に、訓読み、和語に親しみがうすいという結果になりがちである。例えば、「譲渡」というと"transfer"、「促進」というと"promotion"という訳語を思い浮かべるが、「譲り渡す」「促し進める」と聞くと反応が鈍く、読めないということになる。

以上に述べた問題点の結果、漢字・熟語の定着が弱く、新出字・語の意味を類推する力も十分養成されない上、文章を読む速度が遅く、正しく意味を読み取る力もつきにくい。

3. 対応策としてどのようなアプローチが有効か

以上に提示したような問題に対応するために、筆者達が考えた字書のアプローチのポイントは次の六点に要約される。

- 1) 媒体語を使用せず、日本語で意味を理解し説明できるようにする。
- 2) 字の構成要素（部首、音符、その他の要素）の機能を十分理解させる。
- 3) 字の構成要素の形だけでなく意味を重視する。
- 4) 字の構造的理解、字義、定義を、意味を中心に関連付けて提示する。
- 5) 音読みと訓読み、漢語と和語を意識的につながりを持たせて示す。
- 6) 特に、訓読み、和語に親しませる。

次に、このアプローチの根幹となる新型の「字解説」から「字義」「定義」に至る流れを、「理」という字の場合の具体例を示しながら詳しく見ていきたい。

4. 字解説

字解説とは、一般に漢和辞典で「なりたち」「字解」「解字」などと呼ばれる字の構造的、歴史的背景の説明に近いものである。本字書では、パターン化した表現を用いて、部首・構成要素・音符の情報と、字の読み、字義を三段階の定型フレームで表している。まず、表現の型を示すと次のようになる。

第一フレーム

〔部首名〕 部首形（部首の意味）に、〔音〕 音符形（音符の意味）

第二フレーム

「見出し字」は、（構成要素の組み合わせから導き出される意味）ことから、（字の意味の説明・主な字義）、「字の言葉としての読み」の意味に使う

第三フレーム

また、（構成要素の組み合わせから導き出される別の意味）ことから、（字の別の意味の説明・別の主な字義）、「字の言葉としての読み」意味にも使う

以下、各フレームを「理」という字の場合を例に挙げて説明する。

第一フレームでは、字の基本要素を示す。順に、部首の名称・形・意味、音符の音・形・意味となり、字が部首、音符以外の要素を含む場合は、その形と意味も示す。

例：〔おうへん〕 王（玉）に、〔リ〕 里（すじをつける）。

第二フレームでは、第一フレーム中の各要素の意味を組み合わせることで字全体の意味を読み取るようにする。伝統的成り立ちに基づきながら、現代的な感覚でも

理解し易く説明するようにする。構造的解説から導かれる字義を簡潔に表現し、続いて主な訓読みまたは音読み（独立した言葉であるもの）を提示する。

例：「理」は、玉をみがいて美しいすじもようがあらわれるようにする意。そこから、物事の正しいすじ道、「り」「ことわり」の意味に使う。

第三フレームでは、他の重要な字義を示す。漢字には複数の重要な字義があるものが多い。第二フレームで、字の代表的な字義を示し、ここではそれに次いで重要な字義を、前フレームとの論理的つながりをつけるようにして示す。続けて、第二フレーム同様に、字の言葉としての読み（常用外の読みも含む）がある場合は示す。

例：また、物事をきちんとととのえる、おさめる意味に使う。

この「字解説」では、第二、第三フレームの各字義の意味の関連を大事にしている。例では、「理」の第一字義は「物事の正しいすじ道」であり、それが「り」「ことわり」という字自体の読み（後者は常用外の読み）に密接につながっている。第二字義は「物事をきちんとととのえる」「おさめる」で、「おさめる」を常用外の読みとして認めている漢和辞典もある。このように、いわゆる字の解説やなりたちの説明の中に、字義そのものを出している例は他の漢字字書、漢和辞典では少ないようであるが、筆者達は字を日本語で理解し、字自体の読み方と一緒に記憶することは学習効果が高いと考えている。

三段階定型フレームによる字解説の例（「理」という字）をまとめると以下のようになる。

〔おうへん〕王（玉）に、〔リ〕里（すじをつける）。

「理」は、玉をみがいて美しいすじもようがあらわれるようにする意。

そこから、物事の正しいすじ道、「り」「ことわり」の意味に使う。

また、物事をきちんとととのえる、おさめる意味に使う。

この字書では、原則として媒体語を使用せずに日本語で理解し記憶することとしているが、はじめに述べたように、まだ字解説を全て日本語だけで理解することが難しい学習者や、日本語で一応理解したと思われる内容を確認したい学習者のために、英訳も参照できるようにしている。例として、「理」の英訳を載せておく。

[Ou-hen] 王 (round gem/jewel) and [ri] 里 (to mark/to order).

The character 理 has the meaning of polishing a jewel to reveal and present the beauty of the features of its surface. From that sense, it is used in *ri* and *kotowari* in the word-sense of things that have been put into their correct relation and order.

Also, this character is used in the sense of preparing and arranging things in good order (*monogoto o kichinto totonoeru/osameru*).

三段階の定型フレームによる字解説によって期待される学習効果としては、まず漢字の知識（部首、音符、その他の構成要素）に慣れ親しみ、各構成要素の形だけでなく意味の重要性を理解するようになることである。字の意味をパターン化した表現で、各要素の意味を組み合わせた論理的な流れとして理解し、典型的な字義を、各要素の組み合わせの結果として覚える。漢字の主な言葉の読み（音読み・訓読みとして独立した言葉）を、字の意味の説明に関連させることで、日本語での理解を促し定着させる。その結果として、訓読みをしっかりと覚え、和語に強くなる。このパターンに慣れることにより、字の形と意味につながりを持たせ、意味の理解を重視した自習が可能となるのである。

6. 字解説から、字義、熟語例・定義へ

字解説に続いては、字義、熟語とその読み方・定義を示す。

- 1 三段階の定型パターンによる字解説
↓
- 2 字義
↓
- 3 熟語例・読み方・定義

ここでは、字解説からの論理的流れを大事にして、段階的にスムーズに理解を深められるようにする。根本的な字義の表現は繰り返し反映されることにより、関連性を強め、定着をはかる。漢語・和語の関連を理解し、言い換えができるようにする。

また、漢和辞典で字義や定義に頻繁に使われる表現（特に和語）を積極的に使い、それらの言葉に慣れさせるようにする。例えば、「くぎる」「仕切る」「切れ目を入れる」「おおう」「おいしげる」「いちじるしい」等は、字や言葉を説明する際によく使われるが、学習者には比較的馴染みのうすい表現である。筆者達も編集の初めの段階では、これらの表現を避けてよりわかりやすい表現を用いるようにしていたが、編集過程において、字や言葉を日本語で理解するためには有効であると考え、使うようになった。ただし、前後の文脈から意味を類推しやすくしたり、易しい言い換え表現を並べたりして、理解の糸口を与えるように配慮している。

1) 字義・熟語例

字義は、構造的説明の後、まとめて示す。音訓読みに、言い換えた表現を続けることによって、意味を確認し、表現力を豊かにしている。

さらに、字解説から直接読み取れる字義で、字の言葉としての音訓読み以外の字義も加えるようにする。「理」の場合は、もう一つ「自然科学」という字義

が三番目に追加されている。これも「自然界の法則をすじ道をたててきちんとおさめる学問」というように、一番目、二番目の字義とのつながりから派生した字義と理解できる。各字義の後には、熟語例を示す。

- 例： 1. り。ことわり。物事のすじ道。正しいすじ道をたてる。
(熟語例) 理由 理論
2. おさめる。ととのえる。きちんと取りあつかう。
(熟語例) 整理 処理
3. 自然科学。自然の法則を研究する学問。
(熟語例) 理科 物理学

2) 熟語例・読み方・定義・用例／同意語・反意語

各字義の熟語例の読み方と定義を示す。定義は、出来るだけ各漢字の代表的な字義を組み合わせるようにつけるようにする。続けて用例を「 」付けで示し、同意語を「=」、反意語を「⇔」の記号に続けて紹介する。以下の例では、一番目の熟語例のみ示す。

例：

1. 理由 (り・ゆう) 物事のなり立っているすじ道。ある結果が生じたわけ。「正当な理由」「理由付け」
2. 整理 (せい・り) みだれた状態にあるものをととのえて、きちんとおさめること。「交通整理」「整理券」
3. 理科 (り・か) ①自然現象について学ぶ教科。
②自然科学の学問。「理科系」 文科

これまでに紹介してきた、「理」を例とした全体の流れをまとめると以下のようなになる。

・字解説

〔おうへん〕 王 (玉) に、〔リ〕 里 (すじをつける)。

「理」は、玉をみがいて美しいすじもようがあらわれるようにする意。そこから、物事の正しいすじ道、「り」「ことわり」の意味に使う。また、物事をきちんとととのえる、おさめる意味に使う。

・字義・熟語例

1. り。ことわり。物事のすじ道。正しいすじ道をたてる。
(熟語例) 理由 理論
2. おさめる。ととのえる。きちんと取りあつかう。
(熟語例) 整理 処理
3. 自然科学。自然の法則を研究する学問。
(熟語例) 理科 物理学

・熟語例・読み方・定義・用例／同意語・反対語

1. 理由（り・ゆう）物事のなり立っているすじ道。ある結果が生じたわけ。「正当な理由」「理由付け」
2. 整理（せい・り）みだれた状態にあるものをととのえて、きちんとおさめること。「交通整理」「整理券」
3. 理科（り・か）①自然現象について学ぶ教科。
②自然科学の学問。「理科系」 文科

7. 他の字解説の例

「理」の例で見たように、本字書では、字解説で提示した内容が字義、定義と明確な関連性を持ち、字と熟語の理解に役立つものである。他の形声文字の字解説・字義・熟語例・定義の例として、「割」の場合を掲げる。

例：「割」（形声文字）

・字解説：

〔カツ〕害（たちきる・切りはなす）に、〔りっとう〕リ（かたな）。
「割」は、刃で物を切りはなしてばらばらにする意。そこから、一つの物を二つ以上に分ける、「わる」「われる」「さく」意味に使う。
また、全体の中でしめる率や、十分の一、「わり」の意味にも使う。

・字義・熟語例

1. わる。われる。さく。一つの物を二つ以上に分ける。切り分けてはなす。（熟語例）分割 割り込む
2. わり。分けたもの。分けあたえたもの。（熟語例）役割 割当て
3. わり。比率を表すことば。特に、十分の一。（熟語例）割合 一割

・熟語例・読み方・定義・用例

1. 分割（ぶん・かつ）いくつかに分けること。別々にすること。
「分割払い」「二分割」
2. 役割（やく・わり）役をそれぞれに割り当てること。割り当てられた役目。「役割を果たす」「社会的役割」
3. 割合（わり・あい）①物と物の比。全体に対して占める比率。
「十人に一人の割合」
②比べてみると。比較的。思ったよりも。
わりに。「割合に安い」

8. 期待される学習効果

最後に、このアプローチの字書を使うことによって期待できる効果について述べる。第一に、漢字に対する構造的及び意味の関連付けによる理解が深まる。

その際、パターン化された解説に従うことによって、理解・定着が助けられる。第二に、漢字の言葉としての読みを、字の意味の説明に関連させて、日本語での理解を促し定着させる。第三に、音読みと訓読みの両方に強くなり、漢語と和語の関連付けができるようになる。第四に、漢字・熟語の意味を日本語で包括的に理解することによって、応用力が養成される。第五に、自習がより効果的になる。

この字書のアプローチは、五百字程度の基本漢字を習得した非漢字圏の学習者だけでなく、一般的に和語に弱い漢字圏学習者、またやや固い表現・語彙を習得する必要のあるHeritage Learnerにも有効であると考えられる。

9. おわりに

筆者達はこの漢字字書のプロジェクトに約十年間携わり、2010年5月現在の編集過程は、見出し字三千八百字の全ての字義付けと熟語選択を終え、重要字二千三百字（新常用漢字全てを含む）に日本語の字解説を付けたところである。今後の編集予定としては、字解説の英訳、音符・その他の構成要素の包括的整理、重要熟語（約一万二千語）の定義付けに入るところである。

また、本字書を紹介するホームページ (<http://www.kanjiijisho.org>) の開設を2010年9月に予定している。漢字指導にあたられている先生方をはじめ、漢字学習に取り組む学習者の方々からご意見、ご感想をいただければ大変有り難いと考えている。

参考文献

- DeFrancis, John. 1984. The Chinese Language - Fact and Fantasy. University of Hawaii Press.
- DeFrancis, John. 1989. Visible Speech - The Diverse Oneness of Writing System. University of Hawaii Press.
- Halpern, Jack. 1990. New Japanese-English Character Dictionary. Kenkyusha.
- Henshell, Kenneth G. 1998. A Guide to Remembering Japanese Characters. Tuttle Publishing.
- Nara, Hiroshi and Mari Noda. 2003. Acts of Reading - Exploring Connections in Pedagogy of Japanese. University of Hawaii Press.
- Spahn, Mark and Wolfgang Hadamitzky. 1989. Japanese Character Dictionary - With Compound Lookup via Any Kanji. Nichigai Associates.
- Williams, Noriko Kurosawa. 2010. The Key to Kanji - A Visual History of 1100 Characters. Cheng & Tsui.
- Williams, Noriko Kurosawa. 2007. The Kanji Anatomy - An etymological approach to kanji study. Proceedings of 14th Princeton Japanese Pedagogy Forum. Princeton University.

大阪外国語大学 留学生別科日本語研究室編 1969年 The First Step to Kanji. 三友社

大阪外国語大学 留学生別科日本語研究室編 1969年 The Second Step to Kanji. 三友社

加納智恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵理子 1989年「基本漢字500 1 & 2」 凡人社

加納智恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵理子・阿久津智 1993年「漢字 1000 Plus, Intermediate Kanji Book 1 & 2」 凡人社

鎌田正・米山寅太郎 2001年「漢語林 新版 第二版」 大修館書店

武部良明 1989年「漢字の教え方 - 日本語を学ぶ非漢字系外国人のために」 アルク出版社

田嶋一夫監修 (財) 日本規格協会編 1990年「最新JIS漢字字典」 講談社

藤堂明保・松本昭・竹田晃・加納喜光編 2002年「漢字源 改訂新版」 学習研究社

藤堂明保・加納喜光編 2001年「学研現代標準漢和辞典」 学習研究社

藤堂明保編 1996年「ジュニア・アンカー漢和辞典」 学習研究社

下村昇 1993年「小学漢字学習辞典 改訂二版」 偕成社

白川静 2003年「常用字解」 平凡社

鈴木修次・武部良明・水上静夫編 1989年「角川最新漢和辞典 改訂新版」 角川書店

徳弘康代 2008年「日本語学習者のためのよく使う順漢字 2100」 三省堂

新村出編 1998年「広辞苑 第五版」 岩波書店

林大監修 1992年「現代漢語例解辞典」 小学館

坂野永理・池田庸子・品川恭子・田嶋香織・渡嘉敷恭子 2009年「KANJI LOOK AND LEARN イメージで覚える [げんき] な漢字 512」 The Japan Times

山田忠雄編 2005年「新明解国語辞典 第六版」 三省堂

水谷修他編 1994年「外国人のための基本語用例辞典 (第三版)」 文化庁

渡辺茂 1976年「漢字と図形」 日本放送出版協会